

第6回館長講座 『縄紋土器研究の進展』

司会：本日は『縄紋土器研究の進展』と題しまして鷹野館長よりお話をいただきます。それでは、鷹野館長、よろしくお祈いします。

館長：皆さん、こんにちは。お盆の最中、ようこそおいで下さいました。

今朝、仙台市内で、ホテルの横にある駐車場のところを通りましたら、県外ナンバーの車が、すごく多くて、今年もたくさんの人が移動しているんだと実感した次第です。

こういう時期に話をさせていただくというのは、もちろん大学に勤めていた時は絶対になかったことでして、そういう意味でも、私自身珍しい体験をしていると思います。

余談はこれくらいにしまして、今日は、明治以来の縄紋土器研究の中での土器の編年観というか、その辺のお話をさせていただきます。

大森貝塚の発掘調査、そしてその報告書の『SHELL MOUNDS OF OMORI』の刊行などで、日本における縄紋時代の研究というのが始まったと言えるわけですが、モースは、大森貝塚の土器を見ていく中で、この土器は大森貝塚だけで出るんじゃない、日本各地の貝塚でも同様の土器が出土していることを報告書の中でも指摘しております。

その多くが、貝塚から出土していたということもあり、そういう共通性から、前回挙げましたが、坪井正五郎は「貝塚土器」という名前を使っておりました。

まだ縄紋土器という名前は一般化しておらず、モースは大森貝塚の土器について、cord marked potteryと言って、コードマークを縄紋と表現したわけですが、坪井はそういう言い方をせずに、「貝塚土器」と総称していましたが、やはり、どこの貝塚からも同じような土器が出てくるのではないということも同時に認識されていたわけです。

モースの弟子とも言えた飯島魁^{いさお}と佐々木忠次郎の二人が、大森貝塚の発掘にならって、陸平貝塚^{おかだいら}の発掘調査をしました。その陸平貝塚から出土した土器について、飯島と佐々木は「土器は本邦諸地方にて得たるものより通例厚くしてその意匠ははなはだ巧妙なり」と指摘していますが、この「本邦諸地方にて得たるもの」というのは、念頭には大森貝塚と類似の土器というのがあったと思います。大森貝塚などの土器よりも少し厚い、そして「意匠ははなはだ巧妙なり」とは、模様・装飾が華やかだということを言います。

茨城県の陸平貝塚は、霞ヶ浦の南側に位置していますが、椎塚貝塚^{しいづか}はここに近い所にあり、直線距離で10kmくらいしか離れていないところにあるんですがここを八木装三郎^{やぎさぶろう}と下村三四吉^{みよきち}が発掘をします。発掘にあたって、八木と下村は、椎塚貝塚と陸平貝塚が非常に地理的に近いところから、陸平と同じような土器が出てくるのではないかという予想をもって発掘しました。

しかし、その結果、実際に出土した土器というのは、大森貝塚の土器に非常に似たものばかりでした。八木と下村は、この結果を「常陸椎塚介壺発掘報告」として『東京人類学会雑誌』第8巻第87号に報告を載せております。

陸平と椎塚で出土した土器の比較になりますけれども、左のほうは陸平貝塚の土器、右のほうは椎塚貝塚の土器です。また、これは、この時に出土した土器ではありませんけれども、椎塚貝塚という、この土偶がよく出てきます。頭が三角形で山形土偶と呼んでいますけれども、お腹のところがちよつと出っ張ってしまっていて、女性でお腹の中に子どもがいる状況を、かなりリアルに表現した有名な土偶です。

この椎塚貝塚の土器には、大森貝塚のものと同じような模様・形のもので出土しております。

それから、もう一つ、椎塚貝塚という、土瓶形というのでしょうか、ここに注ぎ口があるので、注口土器、注ぎ口がある注口土器と言いますけれども、これもまた有名な資料です。

現代の我々の認識している土器の形式から言いますと、縄紋時代の後期の半ば、これは加曾利 B 式、こちらは加曾利 B3 式という時期の土器です。

このように、陸平と大森の土器は違うということが認識されて、それぞれの土器を「陸平式」あるいは「大森式」と呼んで区別するようになっていきます。八木と下村は、大森式と陸平式の区別はどこにあるんだろうかということについて、これは、製作使用した人種、人の違いではなくて、部落の違い、あるいは時間的な違いだろうと考えました。

つまり、土器の編年への第一歩となっていたわけです。ただし、現在と違って、陸平のほうが新しく、椎塚のほうが古いという認識を八木と下村は持っていました。

なお、この椎塚の土器は、先程言いましたように縄紋時代の後期のもの、陸平の土器は、ほぼ縄紋中期の土器になります。

そうした中で、明治 29 年に、佐藤伝蔵という人が「陸奥亀ヶ岡発掘報告」を『東京人類学会雑誌』に載せます。この中で、大森式とも陸平式とも違う第 3 の種類として「亀ヶ岡式」あるいは「陸奥式」と呼んだ土器を取り上げていますが、この「亀ヶ岡式」あるいは「陸奥式」という名称・呼び方からも分かるように、ここでは縄紋土器の地域差ということで理解されたようです。

つまり、八木と下村が大森と陸平を時期の差と捉えたのとは別の捉え方が「陸奥式」にはされたということでした。

京都帝国大学の浜田耕作が、京都帝国大学文科大学考古学研究報告Ⅱとして出した、『河内国府石器時代遺跡発掘報告』の報告の中で、出土した「土器の系統」と題した論文を発表しました。

この中で、浜田は、国府遺跡出土の縄紋土器を「原始縄紋土器」と名付けました。この「原始縄紋土器」の製作者は、この国府遺跡で発見されている弥生土器の製作者と同一の系統にある「原日本人」であるとしました。

そして、さらに関東などで発見される「アイヌ縄紋土器」、今までの「大森式」とか「陸平式」をまとめたものですが、このアイヌ縄紋土器に先行するものであると述べました。

この頃は、縄紋土器と弥生土器というのは、人種というか、作った人たちが異なる、違うんだという認識がされていたわけで、層位的に縄紋土器と弥生土器が別々に出てきたとしても、人種が入れ替わったから土器も変わったんだという解釈がされることが普通だったわけです。

そういう雰囲気の中で、現代日本人の祖先が、現代というのはこの当時のことですが、日本人の祖先が縄紋時代までつながっているということを想定した浜田の発言というのは注目されるどころです。これが浜田の動きです。

国府の土器が上の土器で、先程の「原始縄紋式」と呼んだ土器ですが、こういうものです。それから「陸平式」「大森式」「亀ヶ岡式」に分けてみました。

今日の認識だと、国府の土器は縄紋時代の前期ですから、これが関東で出ている陸平式や大森式よりも古いというふうに認識したことは誤りではないわけです。

また浜田耕作の土器に関する仕事として、鹿児島県の指宿市にありす橋牟礼川遺跡、この当時は指宿遺跡と呼ばれていましたが、この橋牟礼川遺跡で縄紋土器と弥生土器と一緒に拾われていることを知りまして、大正7年と8年に、浜田耕作と人類学者の長谷部言人などによって発掘調査が行われました。

この調査で、開聞岳の噴火で降った火山灰の下から縄紋土器が出てきて、その火山灰を境にして、上のほうから弥生土器が出てくるということを明らかにしました。発掘の結果、それらを明らかにしました。

つまり、縄紋土器と弥生土器の違いというもの、これは異人種というようなことではなくて、はっきり時代差によるものだということが、この橋牟礼川遺跡の発掘調査で証明されたことになります。

ちなみに、この遺跡は、大正4年に、当時、旧志布志中学の生徒だった西牟田盛健という人が、土器片を採集しまして、これを中学校の先生に持って行った。その先生が報告したことによって、アイヌ式土器、いわゆる今日の縄紋土器と弥生の土器と一緒に出てくる遺跡だということが知られたわけです。そういうことを知って、先程言いましたように、浜田・長谷部などが発掘調査をしたのです。

橋牟礼川遺跡において、始めて縄紋土器と弥生土器の時間差ということが証明され、そのことをもって、この橋牟礼川遺跡は、大正13年に国の史跡に指定されました。戦後、昭和54年に、2.36ヘクタールが公有地化されております。

ここの地図に星のあるところなのですけれども、ここが、指宿市で、平安時代の遺跡も発掘されている橋牟礼川遺跡です。

また余談になりますが、2006年頃から、指宿に7～8年通って仕事をしていたんですけれども、とてもいいところで、今頃の時期になると、指宿の温泉が懐かしくなる頃なのですけれども、地図の山川湾、これも火口なんですけれども、それから鰻池、西郷さんが温泉につかったところ、それから池田湖、これみんな火口なんです。外輪山が、ここにありまして、もう一つの火口が開聞岳という地形です。アメリカのスミソニアン研究所のマップを見ますと、この辺は、イブスキボルケイノ・フィールドと書いてありまして、指宿の火山地帯というような表現がされています。

現在、約2ヘクタールほど史跡公園として整備されていまして、公園の中には、竪穴式住居が復元され、また貝層や地層が見学できる展示施設もあります。遺跡にある陶板ですけれども、ここに縄紋土器と弥生土器がありますが、ここにある縄紋土器は、縄紋時代の後期の指宿式といわれる土器です。それから、竪穴住居ですが、これは縄紋の竪穴ではなく、8世紀後半の平安時代の竪穴住居を復元したものが、4棟ほどありまして、ここは夏休みに子ども達がお泊り体験したりするというも行われています。

それから、下のほう、竪穴式住居が復元されているのは一段高いところで、それから崖のように斜面がありました。この斜面に貝層がありました。二つ前のスライドの写真の、これは崖のところを削って、

ここで火山灰なんかを展示している。この中に貝層の剥ぎ取りによって作られた断面なんですけれども、これが展示されていて見られるようになっております。

そして、編年ということで、次は、松本彦七郎ですが、この人は、東北帝国大学の理学部地質学古生物学教室にいた人なのですけれども、この松本彦七郎は、地質学や古生物学の分野ではごく常識とされていた層位学の方法を遺跡の発掘に持ち込みます。

層位学、学が付いていると難しいことのように思うかもしれませんが、簡単でして、地面を上からだんだん掘っていけば、攪乱のないところでは、当然、上から出てくるものが新しいし、下から出てくるものが古いという関係、これの確認です。

先程の指宿の橋牟礼川遺跡でも、火山灰の上から弥生土器が出てきて、下から縄紋土器が出てきた、まさにそういうようなものなんですけれども。その層位学の方法というのを、貝塚の調査などに当てはめていきます。その貝塚の調査、特に東北地方、仙台湾から三陸海岸の貝塚の調査を通じて、縄紋土器でも一律ではなくて、いくつかの年代差があるのだということを主張しています。

松本彦七郎という方は、そういう意味で活躍されたけれども、この方の業績は、また後で見ますが、1933年の3月31日付で大学から休職ということ命ぜられるわけです。そして、2年後の1935年3月31日付で休職期間が解けたということで退職させられてしまいます。

これは、いろいろな事情があったようで、松本彦七郎は1975年に亡くなっていますが、その後も遺族の方たちは、松本彦七郎氏の名誉回復のためにいろいろなことを行動しておりました。

しかし、松本彦七郎自身の研究史上の功績というものは、非常に大きいものがありまして、ここでは縄紋時代に関するところの功績を紹介しますけれども、書かれた論文の中に「日本先史人類論」があります。この中で、松本彦七郎の主張であるところの縄紋土器の時間差、時代差、地域差というのを明らかにします。第一期から第六期、第五期と第六期は弥生と埴瓮斎瓮^{はにべいわいべ}で、新しい時代ですけれども、第四期までというのが、縄紋時代に相当します。

第一期が大木式^{だいぎ}、これは七ヶ浜町の大木圀貝塚から命名したものです。それから第二期が瀬沢式^{うそさわ}、これは陸前高田にある瀬沢貝塚の土器から命名したもので、第三期が東松島の里浜貝塚からの宮戸式^{みやと}。そして、第四期に大境第5層式^{おおざかい}ということで、これは富山県の氷見^{ひみ}にあります大境洞窟からですけれども、この氷見の大境第5層式というのが4番目にきます。第五期が大境洞窟の上の層にある弥生式の土器の大境第4層式。それから第六期が埴瓮斎瓮時代。埴瓮斎瓮、須恵器から土師器の時代、と区分しました。

今日の編年からみますと、ここでいう大木式というのは、ほぼ前期から中期にかけての土器、瀬沢式は後期から晩期くらいにかけて、宮戸式はほぼ後期の土器と並んでいきます。

こうして時間差を示したのですが、やはり東北地方のものと富山県の大境洞窟の資料とつなげて挙げるといのは、ちょっとこれは無理があったのかなと、今日の観点からはそういう批判ができますが、これは画期的なことです。

次いで、松本は「宮戸島里浜および気仙郡瀬沢介塚の土器附、特に土器紋様論」という論文を発表します。ここでは、東北地方の資料を使って、縄紋土器の紋様の変化を追いかけていきます。この変化の半ばは層位的に立証できているとして、紋様の分類を層位学の結果と結び付けています。

ここでは第一期から第五期に分けていまして、第一期が凸線紋アイヌ式曲線模様の全盛、凸線紋とい

うのは土器の表面から盛り上がっている、プラスの方向に粘土を貼り付けたりして、土器の表面から盛り上がっているもの。凹線紋というのは、土器の表面に線が引かれまして、くぼんでいる紋様です。

アイヌ式曲線模様、これはアイヌ式にあまりこだわることではなくて、アイヌ式土器なんて言われることもあったので、そういうことを書いているのでしょう、曲線的な粘土紐の貼り付けの紋様が全盛の時期です。

第二期が凸線紋アイヌ式曲線模様の^{じょうたい}上退と凹線紋アイヌ式曲線模様の発展。ここでいう上退というのは一つの土器の中で口縁部のほうに隆線の紋様がつけられて、胴体のほうには凹線紋、窪みが作られているという解釈でいいんだと思うんですけれども。

それから、第三期が凹線紋アイヌ式曲線模様の上退と縄紋の発展。つまり、土器の口縁部に近いところに模様が集中してきて、胴部については縄紋がつけられる。単方向縄紋の全盛というのと、単方向縄紋の減少と^{うじょう}羽状縄紋の繁盛。いずれ紋様のお話をする時に詳しくお話ししますが、羽状縄紋というのは一つの方向にだけ縄紋が付いているのではなくて、縄紋の方向が互い違いなんです。矢羽状といいますか、そういうふうにして縄紋がつけられるのを羽状縄紋と呼びます。

そして第四期が縄紋の上退と直線模様の発展、第一次の耳およびアイヌ式曲線模様の全滅。

第五期、縄紋の全滅。これから弥生になっていく、という区別をしました。

模様の変化とそれから層位的な変化を結びつけた研究、それから縄紋の紋様をまとまりで捉えるということを表示したものでありました。

この凸線紋アイヌ式曲線模様の土器というのは、だいたい、後に出てくる鳥居龍蔵^{りゅうぞう}との比較でいうと、厚手式、今までで言うと陸平式のようなところの土器に相当します。

それから、凹線紋アイヌ式曲線模様というのは、ここでは薄手式と言いましたけれど、今までの言い方でいうと大森式などに見られる模様ということが言えます。

第四期の直線模様は、ほぼ晩期の縄紋時代の終末期に近い大洞A式頃に相当するものと言えます。

こういう松本の指摘は、まさに明治年間に八木と下村が大森と陸平を前後に並べて編年したということ以来の決定的な試みといって良いところでもあります。しかも、この松本が取った層位学的手法、紋様との分類との照合という手法は、のちに縄紋土器の編年を完成させるに至ったといわれた山内清男が盛んに用いるようになります。

松本が与えた影響というのは、日本の考古学史上、特に縄紋土器の研究上、非常に大きいものがあつたと言わなければならないと思います。

さて、鳥居龍蔵は、東京帝国大学の理学部人類学教室で活躍していた人です。当初、坪井正五郎のもとで助手を務めていて、坪井正五郎のコロボックル論のために、千島に調査に行つて来たのに、その結果はコロボックル論に反するという事になってしまったという話は前にいたしました。東京帝国大学人類学教室という立場から、縄紋土器研究にしても、指導的な立場にいたというように思います。

鳥居龍蔵は、各地の土器の違い、これを時間差・時期差と捉えるのではなくて、一つの時代の中における、同時代における部族の違いとして説明しようとしていました。この部族の違いというのは当然、鳥居の主張ですとアイヌの部族の違いですけれども、大正9年に発表されました「武蔵野の有史以前」という論文の中で、まず縄紋土器そのものを「厚手式」「薄手式」「^{てお}出奥式」と3つに区別します。

今までの松本彦七郎の土器の区分や松本が使った名称というのは、あまり有名にはならなかったのですけれども、鳥居の「厚手式」「薄手式」「出奥式」というのは結構よく知られるところだったようです。

まず3つに分けました。そして「厚手式」「薄手式」「出奥式」の土器を作ったのは、同一時代に本拠地を違えて居住した三大部族の所産であるとししました。そして、その居住地、三大部族の居住地の地理的な環境とそれぞれの土器を作った部族の使っていた遺物の違いを組み合わせていきます。さらに、そこから生業の違い、生活のための食料獲得方法の違いまで導き出していっています。

だから、土器の違いというのを、今でいう縄紋時代の人々の生活の違いということに結び付けようとしたわけです。今日の観点でいきますと、「厚手式」というのは、大体、中期のもので、今までのものという陸平式、それから「薄手式」は後期のもの、これも言い換えますと、大森式に相当します。それから「出奥式」というのは晩期の土器で、亀ヶ岡式とか陸奥式とか呼ばれていたものに相当します。

この三大部族の違いというのを説明しましょう。まず、「厚手式」の部族の作る土器というのは、「粗造巨大」と表現しています。粗造というのは、荒っぽい作りというのではなく、どうしても土器が大きくなるので作りも荒くなるということです。それから、土偶や土版はないのですが、大小の石棒があり、石鏃や石斧は極めて多く出土する。

一方、「薄手式」の部族のところで出土する遺物というのは、土器は「精巧小型」である。信仰面に関しては、土偶や土版を作っており、石器でいうと石斧はあまり多くなくて、石鏃も乏しいけれども、それに代わるようにして、骨角器、骨や角で作ったモリ先とか釣り針とか、こういったものが出てきます。

この「厚手式」と「薄手式」の部族の居住地が違ってしまっていて、「厚手式」の部族は台地のほうに多く遺跡が残っていますし、「薄手式」の部族の遺跡というのは海岸地帯に見られます。

そういうところから、「厚手式」の部族というのは、男性的で専ら狩猟によって食料を得ており、「薄手式」の部族については、女性的で漁撈によって食料を得ることをしていたと思われるとしています。

この男性的、女性的というのはよく分からないところがありますけれども、土器の違いからすると「厚手式」は大まかで男性的で、それから「薄手式」は小型で精巧だから女性的だと、これは今日の観点ではあまり当てはまらないかもしれませんね。

それから、石鏃の材料となった黒曜石、「厚手式」の部族が作っていた石鏃などの材料となった黒曜石は、長野県の信州の和田峠というところ、諏訪湖のほとりのところですが、ここの産地が知られておりましたので、この武蔵野台地に住んでいた「厚手式」の部族は、信州の部族と交易をしていたのだということも考えています。

また、これらとは別に、陸奥では、陸奥というか、東北地方では、この「出奥式」の土器が作られていました。出羽と陸奥、日本海側と太平洋側ということですから、出羽と陸奥に典型的ということから「出奥式」と名付けていました。「出奥式」の土器というのは薄手で精巧である。それから土偶の中で特徴的なのが遮光器土偶というのがあり、これはエスキモーが使う遮光器という眼鏡をかけたような形の土偶です。それから、緑色の擦切石斧とか有柄の石鏃というのを持つとしました。擦切石斧というのは板状の石をそれよりも硬い石で切るもので、切るというと板をのこぎりで引く感覚ですが、それを石でやるわけです。石で石を擦り切るから擦切石斧と言いますが、時期は違うんですが、北海道で続縄紋時代のお墓で擦切石斧を実際に掘ったことがあるんですが、これは厚みが7~8cmくらいある石斧でした。緑色のきれいな石だったのですが、これは今言いましたように擦り切りですから、この厚みがある

ものの上からと下からと一生懸命擦った跡があるんです。ところが、その厚さのうちの真ん中の3分の1くらいのところには擦り切った跡がなくて、折り曲げて割った跡が見られるんです。3分の1ずつ上と下から擦って行って、真ん中の3分の1で割ったというのはものすごい力があるんだと思いますが、力だけでなく他の道具を使ったのかもしれませんが。

それから、有柄石鏃というのは、石鏃、矢じりの中に茎なかごがあるものです。これは、縄紋時代の後期以降に見られるものが多いのですが、厚手式の石鏃は極めて多いということでしたけれども、有柄のものよりも、無柄石斧なかご、茎のないほぼ三角形に近い石鏃が出ています。

この出奥式の本拠地は出羽と陸奥ということですが、太平洋側は仙台以北で、日本海側は米沢以北と述べましたが、特に生業などについては述べていません。狩猟とも漁撈ともしていません。

とにかく、こういう三大部族というのがありましたが、当然、鳥居龍蔵の日本の石器時代住民観というのはアイヌの部族であるということなんです。

そのアイヌの人たちが生活していた中頃か後半になって、弥生式土器を作った鳥居が言うところの「固有日本人」が侵入してきたというふうに説いています。

こういうふうに、鳥居龍蔵は土器の形式の違いは、時間差ではなくて、同じ時代の同じ時期のものであるという解釈をしたわけです。実際このあと大正12年の「石器時代における関東と奥羽の関係」という論文の中でも、日本の土器形式からは時代の新旧の区別はできないというふうに発言をしています。

ここで「厚手式」「薄手式」「出奥式」「陸平式」「大森式」「亀ヶ岡式」というような区別をしてきたのですが、またそうでないもの、それらと違う土器の認識も残されており、その一つが「諸磯式もろいそしき」という土器です。

諸磯遺跡は神奈川県の三浦半島にある遺跡です。明治30年に先程の八木奘三郎によって紹介されているところですが、この遺跡を榊原政職さかきばらまさもとが発掘をしまして「相模国諸磯石器時代遺跡発掘報告」というのを『考古学雑誌』11巻8号に発表しています。榊原は、浜田耕作の「原始縄紋土器」を継承しまして、諸磯式を、厚手式よりも古拙こせつなもの、古い時期のもの、技術的にも劣っているというものと考えていました。

次に、写真が出てますけれども、諸磯式は、爪形紋を特徴とする土器でして、今日では大体、前期の後半に位置付けられています。この諸磯式の解釈をめぐる、後に縄紋土器の編年研究の旗頭の一人になる甲野勇こうのいさむは、この時点では薄手式よりも新しいもので弥生式により近いものだという考えを示しましたし、谷川磐雄いわお、後の國學院大学の榊原政職ですが、諸磯式・厚手式・薄手式・弥生式、これらをすべて同時代のものだという考えを述べていました。つまりこの諸磯式の解釈については、いろいろ混乱が生じていたわけです。

現在、諸磯式土器は、諸磯a式、諸磯b式、そして、次のページにある諸磯c式と大きく分けられています。3つの段階に分けられていますが、全体として、前期後半のもの。ちょっと見えにくいかも知れませんが、これはただ線を引いてあるのではなくて、竹を半分に割った断面が半円の形になるような器具の先端を使って模様を付けていくんです。ただ引くんじゃなくて、押して動かして、押して動かしてというふうにして、こういう線を作り出した。かなり手間暇のかかるものです。

半分に割った竹のこの部分を使って押して、アルファベットのCのような感じになるんです。それをずっと並べる爪形文つめがたもんというのですが、道具を使って模様を付けるという時期です。小型の土器もあって、

用器画，器具を用いて絵をかくというような見方をする人もいます。

この諸磯 c 式の土器のうち，こちらの二つは，長野県や山梨県で出土する土器なんです。これも，このところは半分に割った竹で線を引いていく，すきまをなくすようにして線を引くわけですが，口縁部のところに付いているこういうモチーフは，これはどうも貝殻をイメージしていると考えられるのですけれども，山梨県とか長野県とかいう海のないところに出てくる土器に貝殻をモチーフにしたというものがあるのは，面白いと思います。

それから，この土器は見ていてなんというか，ものすごく手間暇かかっているなど，よくこんなもの作る暇があるなど，暇があったんでしょうね。

先程言ったように，この半分に割った竹のような器具の先端をちょっと動かして押して，ちょっと動かして押して，渦巻紋とか同心円紋を作っている，とにかく縄紋土器の典型と言っては怒られるかも知れませんが，空いたところを作らないという縄紋土器を作る人達の意識というのはこういう所出てくるかなと。

こういう中で，大正 13 年に千葉県の千葉市の加曾利貝塚の発掘というのがありまして，これが土器研究のうえで大きなステップとなったところがあります。

東京帝国大学の人類学教室によって，この頃，遠足なんていうのがなされていました。遠足といってもただ遊びに行くのではなくて，人類学教室ですから，遺跡の発掘ということが目的でもあったわけです。その遠足で，大正 13 年には千葉市の郊外にあります加曾利貝塚の調査がされます。

小金井良精^{りょうせい}，これは人類学者です。松村瞭^{りょう}，この方は早く亡くなるんですが，この方も人類学者。次の山内清男，甲野勇，八幡一郎ですが，この 3 人は，後に「編年学 3 人衆」と呼ばれたりするわけですが，この土器の型式学的な研究それから層位学的な研究ということを推し進めていくことをしています。この人たちが加曾利貝塚の発掘に出掛けまして，その結果を，この中の一人の八幡一郎が，『人類学雑誌』39 巻 4・5・6 号に報告をしています。

この頃，先程言いましたように，山内，甲野，八幡の 3 人を中心にしまして，型式学と層位学に起点を置いた，つまり松本彦七郎が進めていた方法をうまく取り入れて，縄紋土器の編年学的研究を進めていました。その中で，この加曾利貝塚の発掘というのは，研究の方向に確信を与えたという言い方をしています。

これは加曾利貝塚の全体図です。現在でも，この貝塚の規模は，日本で一番大きい貝塚だとされていますが，実は二つの貝塚が重なったものと言ってよいのでしょうか。上の北貝塚には円形に貝層が堆積しています。それから南貝塚は大体こういう貝塚で，ここ開いていますので，馬蹄形貝塚^{ばていけい}，馬の蹄^{ひづめ}です，蹄鉄の形で馬蹄形貝塚と言いますが，もともと円形も馬蹄形が繋がったもの。これも発達していくと円形になっちゃうのだったのだらうと言えますけれども，基本は馬蹄形なのです。この貝塚の E 地点と B 地点の発掘を，この時にしています。

それまで貝塚の調査というと貝層を掘って貝層からどんなものが出てくるかなと探して，それで終わっていたんです。ところが，この時はこの貝層の下の層まで掘っていった。特に，B 地点で貝層の下

の「黒味を帯びた褐色の土の層」、これは八幡一郎の表現ですけれども、現在風に言うと、黒褐色土層といえますか、そこまで掘り下げていきました。

そうしたところ、このB地点で、貝層の中から今まで言われてきた薄手式、つまり大森式などに近い土器が出てきた。さらに、その貝層の下の黒褐色土層からは、E地点の貝層から出土する土器に類似した土器が、ほぼ厚手式・陸平式、それに相当するような土器がみられました。

だから、B地点の層位でいうと上の層からは薄手式が出てくる。つまり、厚手式と薄手式の層位的な関係というのが、はっきりした。特に貝層というのは、普通の土じゃありません。ここは、ほとんど今までの言い方でいうと、純貝層に近い貝層ですので、明らかに下の層とは全く違うんです。そういうわけで厚手式と薄手式の層位的な違いがはっきりします。

後に、このB地点の貝層出土の土器は、地点の名前を取って加曾利B式と命名されますし、E地点の貝層の土器というのは、これも地点の名前を取って加曾利E式と命名されるにいたります。

最初のところの復習になりますが、八木奘三郎、下村三四吉は、これを逆に考えています。しかし、ここでは層位的な事実がはっきりしている。

この貝塚は、まさに、その貝が高まりをもって堆積していき、貝層が堆積して高くなっていき、真ん中がくぼんでいるという状況が、北貝塚では特に顕著です。ここに貝層の断面の観察できる施設と遺構の観察できる施設が作られています。それからB地点のこちらのほうにもやはり貝層の断面の観察施設が作られています。

貝塚という貝層の部分だけ調査していた。しかし下まで掘ったら違うものが出てきた。それと同じように、この遺跡というのは貝塚があるところだけが遺跡ではなくて、当然その貝塚のまわり、まわりというか周辺にも、生活の跡があるはずだということから、調査をしていくわけです。実際こうしたところで多くの遺構が見つかったりしている。

B地点とE地点には、それぞれ表示がありまして、こちらがE地点の表示ですけれども、B地点ともどもそれぞれ学史的な背景を遺跡の中で表示しています。

この結果について、後に山内清男は後に証言しています。加曾利貝塚のまとめなのですけれども、「加曾利貝塚の発掘は、土器型式の内容決定、層位的事実、年代的考察にむかって僕らを躍進せしめた。加曾利E地点貝塚発掘の土器、加曾利B地点貝塚発掘の土器は各別個の一型式と認められ、爾後地点の名称は夫々の形式を指示する言葉となった。」つまり、加曾利B式・加曾利E式ということですが、「加曾利B地点貝層以下の土層には「堀之内式」がやや多量、加曾利E式に近縁な土器が少量発見された。」

ここで、また違う名称が出てきました。堀之内式というのは、市川市の堀之内貝塚から取られた名称ですけれども、これは、加曾利B式よりは古い、加曾利E式よりは新しい、大体後期の前半の土器形式ですが、こういうことを経まして、その後の研究を進めるのに大きな原動力となったわけです。

加曾利貝塚の現況なのですが、左の写真が貝層が北貝塚です。これが貝層の堆積でして、この中に貝層の観察施設があり、まさにこう盛り上がっているんです。こういうのを貝塚と言うんでしょう。貝が、ちらほら分布している遺跡も貝塚だと呼んでいますけれども、塚というからには高まっていないと本当は塚じゃないわけですが、これは本当の意味での貝塚です。この断面の観察施設が1960年代だったと思

うんですが、作られています。

こういう貝層の真ん中を切って断面をそのまま残しているんです。この施設を作った時は本当に苦労をしまして、何を苦労したかという、土の表面をそのまま露出しているわけですから、どうしてもそのままいくと、苔が生えたり、草が生えたり、となります。それを防ぐのにどうしたらいいかという実験のための場でもありました。表面に薬剤を塗付したりして、それが一体どれくらい持つのかということを実験したりとかということの苦労がされていまして、大抵のところ、苔が生えて青くなってしまったところが、たくさん見られます。そうしないところは、この表面をピタッとガラスやアクリル板で覆っちゃうということをしたりして、どうしても、それじゃ見にくくなるということで、さまざまな実験がされています。これは南貝塚に新しく作られたもので、貝層の断面の観察をするものなんですけれども、これになりますと貝層をそのまま露出させていません。これは貝層の表面をはぎ取って断面を見せています。貝層の断面に布を張り付けて剥ぎ取るわけです。もちろん接着剤をしみ込ませたように剥ぎ取るんです。

この博物館にも貝塚の展示室に剥ぎ取りした貝層をそのまま展示しています。こういう形ですと、土そのものではありませんから、そのまま見せていても、表面に苔が生えたりすることはないので、非常に便利に展示のために使える道具となっています。

ちなみに、この貝層や土層の剥ぎ取りの標本を作るというのは、東京の泉岳寺^{せんがくじ}、赤穂浪士で有名な泉岳寺の近くの伊皿子貝塚^{いさらご}というところで慶応大学の鈴木公雄^{きみお}先生が始めて試みましたが、標本として残せる、今まで貝塚は、そのまま貝層として保存していかないといけなかったのですが、なかなか、こちらのように貝層そのものを保存して人に見せることはなかなかできないという状況だったのが、剥ぎ取りの標本を作ることによって、標本として活用できる。展示室の中に持ち込めるし、運び込むことができるというのを紹介されました。

それから、竪穴住居の保存施設もありまして、掘ったままの状態を、そのまま見せていて、これもかなり古い段階でございまして、土の表面を掘ったときのまま維持するのは大変です。放っておくと、風化して、どんどん壊れてしまいますから、それを防ぐ為の様々な工夫というのがなされていました。

ちなみに、この発掘区のまわりに絵が書かれていまして、当時の人たちの生活の様子が漫画風に描いてあるのですが、これは漫画風だから、あまり目くじら立てることはないのかも知れませんが、この頃よく描かれていた漫画に、園山俊二という方の『はじめ人間ギャートルズ』というのがあるんですが、あれは困ったものなんですね、実は。縄紋時代人とは限りませんが、昔の古い人の、石器時代人というのかな、そのイメージがどうもあれで、僕も作られたところがありますけれども、それに近いような絵が描かれています。行くたびに、何とかならないかなあと思いましたけれども、子どもには分かりやすいからいいのかなあとも思ったりしています。

それから、南貝塚のほうには、いくつも竪穴住居が復元されているんですけれども、わざわざ屋根をかけないで建物の骨組みだけを見せるという展示もしています。骨組みを含めて4棟建っていますが、4棟という数がこれでいいのかどうかという検討は、当然されなければいけないんです。縄紋時代の集落が、三内丸山みたいに、でっかいのは別ですけども、きちんと検討していくと縄紋時代の集落の規模というのは、多くてもこんなもんだろう、多くても4軒か5軒くらいが1単位、大体2~3軒だろうと思

いますけども、そのくらいでひとつの集落というのを形成していたようなのです。

だから、発掘の結果、何十軒も家が出てくる可能性がありますけれども、あれは今、我々が発掘をするから、何十軒も出てくるので、細かく分析していくと、同時に建っていた家というのは、2〜3軒、多くても4〜5軒だと言われます。

これもそうなのですが、竪穴の窪みの外側にこの柱が出てくるんです。柱が地面に刺さって復元されているんですが、縄紋時代の家は何軒か掘っていますけれども、竪穴の外側に柱が出てきているその跡というのは、ほとんど見たことないんです。穴を掘らないでも良かったのか、つまり柱の為の穴は家の中であって、外側に出ているのは支えているだけなのかも知れませんが、それでも、ちゃんと立ってれば、少しは痕跡が残るはずだと思うんですけども、あんまり見たことがない。かねがね竪穴の凹みの外側にこういう柱が出て復元されていると、これでいいのだろうか、ずっと思ってきました。

ちなみに、先程の遠足の話の続きになりますが、東京大の人類学教室、あるいは人類学会などによる東京近郊の貝塚の発掘というのは、遠足会という形でよくされていたようです。そういう遠足会の中で、特に重要と言ってよいと思うのが、千葉県の市川市の姥山貝塚^{うばやま}の発掘調査です。大正15年に行われたのですが、始めて竪穴住居が発掘されました。それとともに、発掘された竪穴住居の中から、ここに見られるような5体の人骨が、そのまま横たわっているところが発見されました。

竪穴の窪みの中に、竪穴が少し埋まったような状態で中から、人骨が発見される、つまり、ちょっと埋まりかかった竪穴がお墓として利用されるということは、よくあるんですけども、こういうふうに床にぴったりくっ付いている、間に土を挟まず床にくっ付いて人骨が発見されるというのはあまりありません。

一つの竪穴住居の床に、5体があるんですが、5体の内訳は、子どもが1体、成人の女性が2体、成人の男性が2体、合計5人が発掘されました。何らかの事故に遭ったということが考えられるのです。事故だったとすると、なんだろう。私はフグ中毒説を唱えていたんですけども、どうか分かりません。ただ、縄紋時代の人達は、フグは食べていました、確かに。というのは、フグの骨が貝塚から出土しますのでフグに毒があることを知って食べていたんです、多分。骨が出てくるということは、その魚を解体して食べているということだから、フグは食べていたんでしょう。フグ中毒というのは全く想像ですけども、そんなことすら考えさせるような状況なのです。

ただ、これについては、事故に遭った事故死ということではなくて、ちゃんと埋葬された結果であるという見解を発表する人もおります。どちらが正しいか分からないんですが、埋葬というか、間に土を介在していないので、床の上にぴたっと乗っているの、この5人は同時に亡くなっているんだろうなということが想像されます。

男が2体、女性が2体、子どもが1体ですが、これもちょっと不思議なんです。年齢構成は記憶がはっきりしませんけれど、当時の家族でこれが一軒の中の居住者だとすると、当時の家族が少なくとも、一夫一婦制の現在の我々の生活とは違うんじゃないかということも想像させる例になっています

左上が、日本で最初に発掘された竪穴住居跡です。

この写真は現在の、というか、整備途中の状況ですけども、姥山貝塚です。このブロックで囲っ

たところ、これは、この内側に貝層が分布するよということを示していきまして、ここは、接続口とありますけれども、ここに先程の写真がありました。ここには5体の人骨が出てきた遺構があるという表示をしています。

武蔵野線という環状線が、千葉県から埼玉県を通って東京の府中本町までありますけれども、武蔵野線の船橋法典という駅のすぐ近くにあるんです。これは前にも言いましたように、整備途中で園路ができていない状況なのですが、現在は、もう草ぼうぼうになっていきまして、専ら犬の散歩の場になっていたり、今言った船橋法典の駅への近道になっていて、遺跡公園としてちゃんと機能していないという悲しい現状にもなっています。

この加曽利貝塚にしても、姥山貝塚にしても、東京湾岸に残る大きな馬蹄形貝塚の一つでありまして、ここで東京湾岸の貝塚群というのを世界遺産にしようという運動があるそうですけど、この状況では、到底、無理だということが言えます。

ちょっと早いんですが、今日用意したお話はこのくらいです。縄紋土器研究、とにかく、今まで漠然と言われていたものが、縄紋土器の中には時代差が、時期差があるんだということが、非常にはっきりしてきたということが、大正から昭和の始めにかけて明らかになったと思うのです、今までのお話で。

司会：それでは、皆さん最後までご清聴ありがとうございました。鷹野館長、ありがとうございました。

館長：どうもありがとうございました。

(拍手)

司会：次回のご案内をいたします。2週間後になりますが、8月最後の土曜日、8月27日に「編年学派とミネルヴァ論争」と題しまして、鷹野館長より、第7回の館長講座のお話をいただきます。

次回もよろしく願いいたします。今日は、最後まで、ありがとうございました。